



会話はキャッチボール

きちんと受けて、きちんと返すことが大切です。

具体的な説明に入る前に、「そもそも」「会話」とはどのようなものか、「会話上手」とはどのようなことを言うのか、その基本や前提となる考え方をしっかりと身につけておく必要がある。

「会話はキャッチボール」という言葉があります。これは、相手の言葉をつまみ受けて、上手に投げ返すのが会話だ、という意味です。会話は言葉を使った気持ちのやりとりのなかで、**投げた相手の気持ちを探りながら、返してゆくような言葉を投げ返す**必要があります。

たとえば、公園で近所さんと会ったとき、

「うーん、今日は、すごく天気ですね」

と話しかけられたとします。この投げかけに対して、

「夕方は大雨らしいですね」

とききなり返したのでは、「あーさつを交わした」という相手の気持ちを裏切ることになり、キャッチボールとして成立しません。仮に天気予報で「夕方から大雨」といっていたのだとしても、まずは相手からの投げかけを「こんにちは」で受けたうえで、「そうですね、でも残念なことだ、夕方から大雨になるらしいですね」「な、な、な、返してあげることが必要です」。

ほかにも、

「これからクラウンタイム社に行くんだが、資料はいいところあるか。」
という投げかけに対し、

「クラウンタイム？ それって馬の名前ですか？」

なんてカーブで返しては相手が困ってしまいます。

「うーん、この案件、大丈夫かなあ、ちょっと不安だなあ」

第1章 正しい会話と上手な会話について考えてみよう

どうして投げかけに対し、

「君のネットが嫌いなんだよねー」

どうして速くボールを投げつけるのも危険です。

わんこ様、

「僕はコートルスが好きでね、いまでもむかしのTOPをレコードプレイヤーで聴くんだ」

どうして投げかけに対し、

「くえ、ネットなの。あっ、ネット、昨日、代官山に行ってる……」

なごう、投げられたボールを無視して、足元の石を投げ返してもいいけません。

相手が投げってきたボールをきちんと受け取り、こちらからも相手が受け取りやすいように投げ返してあげる。このスムーズなやり方で初めて会話のキャッチボールが成立するのです。この際、ちょっとした投げ違いをすると、キャッチボールが成立しない、あるいは始めからなげなげなやり方になります。

第1章  正しい会話と上手な会話について考えてみよう



なごうと投げかけの会話

「キャッチボールにもタイプがあります」

「上手な会話」の題で書いておきたところ「上手な会話」。そのためにも重要な「上手な会話」の例を、このように挙げてみます。

《会話例1》

A 「おえ、君はうちの旦那だっけ。」

B 「岡田じゃ」

A 「岡田が、どうしてこんなところなんだよ」

B 「まあ、瀬戸内海に面してる、温暖な街です」

A 「食べ物もおいしいんだろっけ」

B 「桃、マスカットあたりは有名ですよ。あと、お土産として言えば岡山干柿が」

第1章 正しい会話と上手な会話について考えてみよう



《会話例2》

ア「ねえ、おまえの出身、どこだっけ？」

イ「岡山だよ」

ア「ああ、キビ団子の。あれもうつとちあ、家来になれっついわれっつるみたいだね」

イ「おまえはどごなんだよ？」

ア「俺？ パリ」

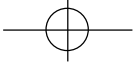
イ「おまえにそんな異国情緒ねえぞ」

ア「パリの場所、知らないんだろ。山形と青森のあいだにあるんだ」

イ「あいだって、それ秋田じゃん。ああ、なまはげの子孫で感じは充分するわ」

このふたつの会話、どちらも話題は「出身地」ですが、受けた球の投げ返し方に少し違いがあることに気づきますよね。

会話例1は、Aという人が質問者に徹して、Bという人の話を聞いているタイプです。そのため、Aの言葉を消して読んでも話の全容がつかめます。



第1章 正しい会話と上手な会話について考えてみよう

一方、会話例2は掛け合いというタイプで、どちらが話す、または聞くという役割分担がありません。ですからアカイのどちらか方を消すと会話がつかみにくくなります。

会話は2名以上の人がいて成立しますが、みんなが黙っていると始まりませんし、いっせいに話しても成立しません。会話が成立するには、スピーカー（話し手）とリスナー（聞き手）が必要です。そして会話の基本は例1のような、リスナーとスピーカーの役割分担が明確なタイプ。つまり、どちらかがスピーカーとなり、他方はリスナーとなる。ピッチャーとキャッチャーがしっかり決まっているスタイルです。

それに対して例2は基本を変形させたタイプで、ピッチャーとキャッチャーといった明確な役割分担がなく、内野手同士でボールを回しているようなスタイルです。こちらはいわば応用編で、親しい相手との会話や、ある事柄について意見交換をするような対話形式で用いられます。

基本を知らずに応用を理解するのは難しいですし、無理して使うと危険です。なので、まずは基本的な話し方、聞き方から見えてくることがよい。応用は、そのあとで。



会話上手の時間

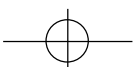
〜話がウケないのは話がウケてます〜

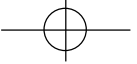
みなさんのなかには、「僕の話はウケがわるい」「私が聞き手になると場が沈む」といった悩みをお持ちの方もいらっしゃるかもしれません。

ではなぜ、ウケが悪かったり、場が沈んでしまうのか。会話の「要素」を分解すると、その原因がわかりやすくなります。

会話は3つの要素で構成されています。

- ① 話の中心
 - ② 相手に伝える表現力
 - ③ 相手に楽しい時間をあげようという気持ち
- この3つが揃って、上手な会話ができます。なにかが欠けていると、





第1章 正しい会話と上手な会話について考えてみよう

うまくいきません。これは、スピーカーにもリスナーにも当てはまります。

たとえば、自分がスピーカーをしているときに「話がウケない」原因は、

- ① 話の中身自体がおもしろくない
 - ② 身振りや話のテンポなど、おもしろさを伝える技術がたりない
 - ③ 相手を楽しませようという気持ちがたりない
 - ④ ①～③が複合している
- といったことが考えられます。

一方、リスナーをしていると「場が沈む」のなら、その原因は、

- ① スピーカーの話をうまく盛り上げたり、進行をせよあげられない
 - ② よく聞いているのが相手に伝わっていない
 - ③ 相手に楽しんで話してもいいという気持ちがたりない
 - ④ ①～③が複合している
- といったことが考えられます。



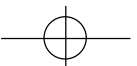
テレビでは楽しい教科書です

まずは好きな芸能人のロマネから始めましょう

私は以前、水商売のコンサルタントとして、店舗の運営管理やホステスの人材育成、接客指導などをしていたのですが、ホステスへの会話指導のときには「テレビを観ること」をすすめていました。とっつきやすいから、とつづのも理由のひとつですが、最大の理由は「よいお手本から学べる」からです。

テレビには会話の達人がたくさん登場します。ぼんやりと観ていれば楽しいだけで終わってしまいますが、観方を少し変えると、上手な会話のとてもいい見本になるのです。

たとえば、ホンジャマカの石塚英彦。彼はグルメリポーターとして洒落たレストランへ行き、こっそりレポートをすることがよくあります。



第2章

好かれる聞き方 笑いがとれる聞き方



観て、よいところをマネることが、会話能力を高めるトレーニングになるのです。

まずは好きな芸能人のロマネから始めてみましょう。慣れてきたら、好きではないけれどマネる必要がある芸能人の観察を試みるのもいいでしょう。たとえばあなたが営業マンで「中年の主婦にウケるようになりたい」「と考えるなら」「中年の主婦に好かれている芸能人」を観察するのです。

ただし、マネる相手（芸能人）と自分とでは考え方やレベルが違いすぎると思ったなら、もう少し自分のキャラやレベルに近い芸能人を探しましょう。あまりにも自分とは違いすぎる人をマネても、なかなかうまくいきません。

「こつこつ作業を繰り返していくと、いろんな話し方や聞き方ができるようになります。そうすることで、対応できる相手も増えていきます。そして徐々に会話上手になっていけるのです。

次章から、いよいよ具体的な会話術に入ります。会話にはスピーカーとリスナーが必要ですが、まずは、よいリスナーになる方法からお話ししますね。